

成長戦略築く

化学市場の動向

逆風に立ち向かう化学産業



日本化学工業協会会長

高橋 恭平氏

安全確保が大前提

「黒子」の重要性をアピール

昭和電工の高橋恭平会長が5月28日付で日本化学工業協会(日化協)会長に就任した。高橋会長はこれまでの2年間、石油化学工業協会(石化協)会長として、石油化学用ナフサの免税措置の実質無期限を勝ち取るなど国内化学産業の競争力確保に尽力してきた。相次ぐ事故に加え、円高や原料高など日本の化学産業に吹く逆風にどう立ち向かうのか聞いた。

日化協会長としての抱負は、「化学は自動車や電子機器向けに新素材を提供して新しい市場を作り出している。さまざまな地球環境の問題解決にも化学産業が生み出す素材やプロセスが大きな貢献を果たしている『黒子』の役割を、より多くの人に知ってもらう必要がある」としている。

日化協の第一の課題として、環境・安全分野での取り組みを挙げる。化学工場が頻発している事故を確保することが大前提となる。

「9月27日に英国で国際化学工業協会協議会(ICC)の総会があり日本が担当する政策課題『エネルギーと気候変動』について発表した。日化協が中心となって開く。『化学産業の生命線は研究開発にある。医薬品や合成化学を含む日本の化学工業の研究費は約2兆3000億円である。全産業の約2割を占める。政府が原子力発電にかわるエネルギーを全産業に採用してもらうために必要なのは何ですか。』

「化学・物理学者のノーベル賞受賞者を14人輩出するなど学術分野での日本の高いレベルは必ずしも化学産業に生かされていない。欧米では化学の博士号とグローバルな感覚を両方持った化学経営者が多いが、日本は比較的少ない。これまで大学での教育を産業界に生かせる構造がつくりにくかったからだ。産業界と学術界に共通の方向性を持たせるべく、博士課程で学ぶ学生を化学企業37社が支援する化学人材育成プログラムを始めた。小中学生に対する基礎教育分野でも、化学の面白さをより実感できる授業を行うつもりで教師向けセミナーをアカデミアと共同で新設し、次世代の化学者育成につなげていく」

日本の化学産業が海外に比べて高い原料コストと円高といった7重苦に対応した成長戦略を進めている。スーパードライバッグなどに使う汎用石化製品の国際競争力が弱まる中、カギを握るのは国内需要に応じた国内生産拠点の再編と主力化学品の海外展開。これまで培ってきた触媒技術を生かし、シェールガスに対抗できるコンビナート形成も始まった。

国内エチレン設備

鹿島や千葉で再編

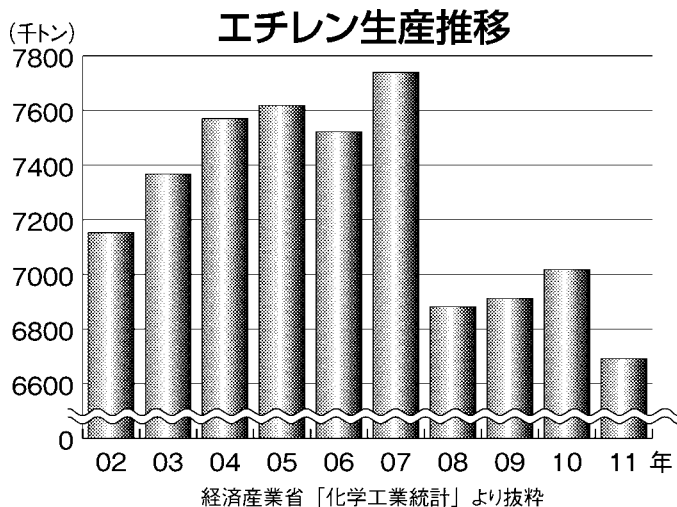
石化製品の主原料エチレンの2012年1-9月期の国内生産量(速報ベース)が前年同期比10・2%減の454万トンと迷、円高による誘導品の

国内需要の増加が見込まない中、化学各社は強みを持つ主力化学品の海外展開を強化させている。旭化成はアクリル繊維やABS樹脂に使うアクリロニトリル(AN)の年産能力を15年度に現状比8割増の141万トンに増強する。タイや韓国、サウジアラビアで生産設備を増強し、世界最大手を目指す。低燃費タイヤの増強180万トンに増やし

主力品を海外展開

重質油有効活用へ

原料の溶液重合法スチレンブタジエンゴム(SBR)もシンガポールなどに工場を新設し、年産能力を15年度に約20万トンと現状比で倍増させる。三菱レイヨンはアクリル樹脂の原料となるメタクリル酸メチル(MMA)モノマーの生産を韓国やサウジアラビアで増強。14年末に現状比24%増の180万トンに増やし



（石塚博昭三菱化学社長）必要に迫られた。いち早く動いたのは三菱化学、鹿島事業所(茨城県神栖市)に2基あるエチレン生産設備のうち第一設備(年産能力39万トン)を14年5月の定期修理後に廃止することを決めた。水島コンビナート(岡山県倉敷市)でも、旭化成ケミカルズと双方が持つエチレン生産設備を1基に集約する検討を進めている。

三井化学も、13年8月に市原工場(千葉県市原市)のエチレン生産設備(同55万3000トン)の稼働率を70%に下げても採算が得られるように改造することを決めた。

問題

科学は世界経済に何ができるか。

大統領も認めている。マネーゲームは終わった。

環境分野への投資が、次の世界を動かしてゆく。

電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池。それは、旭化成が発明した環境技術です。

グリーン・ニューディールという新語に象徴されるように、今、環境のための技術が、経済成長の役割も担おうとしている。はたして、その期待に応えられる技術が、世界にどれだけあるだろう。

電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池。これは、1985年、旭化成の吉野彰が発明した。多くの科学者があきらめてきた新たな二次電池(充電可能な電池)の開発。

そこでは、正極、負極に用いる素材の問題が極めて大きい。吉野の発明は、様々な素材技術を持つ旭化成ならではの発明。

(現在、リチウムイオン電池内のセパレータは世界シェア1位である)蓄電量が大きい。軽量である。有害物質を含まないなど、優れた性能を持つこの電池の誕生で、

パソコンなどのモバイル化が一気に進んだ。そして今、電気自動車が走り始めている。人々の期待をのせて。

旭化成は考える。長年培ってきた環境技術で、もっと世界と競い合おう。それが、この国の次の成長につながる。そして、世界の経済を活性化してゆく。

昨日まで世界になかったもの「リチウムイオン電池」。詳しくは www.asahi-kasei.co.jp

昨日まで世界になかったものを。

AsahiKASEI